

近世天王寺村梓神子の諸相

——都市大坂に生きる梓神子——

堀 岡 喜美子

〔抄 録〕

柳田國男は「巫女考」の中で、都市部に定着し活動した口寄せ神子の一例として大坂天王寺村の梓神子を挙げている。近年、近世の梓神子に関する研究は大きく進展しているが、その多くは地方の様相であり都市部における研究は少ない。

天王寺村梓神子は、都市大坂に隣接する神子町と称される地域に集住し活動を行っていたが、その諸相について充分解明されているとは言い難い。本稿は近世の刊行物と四天王寺に関する史料を手掛かりに、第一に彼女たちが活動した神子町について検証し、第二に神子たちの夫と四天王寺との関係から神子および神子の夫の社会的位置について考察する。最後に近松浄瑠璃より梓神子を取り巻く環境や口寄せの様相を明らかにする。そしてこれらについて検証する中で、都市大坂における梓神子の特性についても考察するものである。

キーワード 梓神子、神子の夫、神子町、四天王寺、都市大坂

はじめに

柳田國男は「巫女考」の中で、「ミコ」は神社で神楽などを奏する「神社ミコ」と、巷の村や町で人々の求めに応じて死霊や生霊を呼び出す「口寄ミコ」に大別される、と述べている。「口寄ミコ」については、「大抵、何村の住民であるかよく分からず、少なくとも五里八里の遠方から来る旅行者である。」としつつ、一方、一定の地に集まって居る例として、京の北野等持院、江戸の亀井戸、大阪では天王寺村の梓神子を挙げている⁽¹⁾。ミコの様相についてはその後の研究により、柳田の分類を基軸としながら多様な存在形態があることが明らかにされているが、近世における口寄ミコ（梓神子を含む）は、柳田の記述にあるように地方と都市部とはその活動形態に相違があったと考えられる。

近世神子に関する研究は近年大きく進展しているといえる。神田より子氏の東北神子⁽²⁾、西田かほる氏の甲斐国⁽³⁾、中野洋平氏の信濃地方の神子研究⁽⁴⁾等であるが、これらの研究成果より東北の神子は修験と同等の位置にあり自らが旦那場を持っていること、甲斐国梓神子は、詳細は不明だがなんらかの形で旦那場を廻り、また、信州地方の梓神子は習合家の配下にある

神事舞太夫に組織され旦那場を廻る存在であったと認識される。さらに地域により様相も一様でないことも明らかになってきている。

一方、近世都市部での梓神子研究は、管見の限り岡佳子氏が京北山散所に関わる地域として神子町に言及しているものが挙げられるが⁽⁵⁾、全体として進展している状況にあるとは言い難い。

大坂天王寺村の梓神子（以下、天王寺神子とする）については、大阪の郷土史家である牧村史陽の『大阪ことば事典⁽⁶⁾』「巫女町」の条に多くの字数を割いて記されている。その内容は、「巫女町」とは巫女たちが集団で口寄せ業を行っていた故の俗名であり、大正初期まで秘かに営業が行われていたことや、近世や明治期の随筆、近松浄瑠璃に描かれた口寄せの様子引用により天王寺神子について説明されたものである。これらの内容はあくまでも事典として、天王寺神子に関する資料や様相を断片的に記述したものであり、当然ではあるが「巫女町」をはじめとし天王寺神子の諸相について追究されたものではない。

天王寺神子、および「巫女町」は、『大阪ことば事典』に記された随筆や文芸作品以外にも、近世大阪において刊行された随筆や地誌、案内書に散見され、彼女たちは大阪周辺においてよく知られた存在であったことが窺える。その内容は「巫女町」の誕生や、天王寺神子の夫と四天王寺との関係をも示唆されるものであり、天王寺神子研究の重要な史料となっている。

本稿の目的は、こうした近世大阪の出版物および四天王寺に関する史料⁽⁷⁾より、天王寺神子の諸相に関して考察するものであるが、主に次の三点について検証していきたい。

一点目は天王寺神子が活動の拠点とした「神子町」（以下、括弧外す）についてである。神子町は随筆の内容から近世になって創られたと考えられるが、その成立時期はもちろんその背景に関しても不明な点が多く、都市での梓神子を考察する上で、神子町の創立について追究することは重要であると考ええる。

二点目は「林ノ者」と称され、四天王寺の下級役人として聖霊会などに獅子・菩薩等の役として奉仕した神子の夫についてである。かれらと四天王寺および周辺町との関係を検証し、その社会的位置について明らかにするものである。

三点目は『大阪ことば事典』にも記されている近松浄瑠璃より、梓神子の口寄せの具体的な様相と宗教性、および都市部における梓神子の特徴を明らかにすることである。近代前の口寄せの様相は、現在の神子の姿より一定想像できるものであるが、近世における梓神子の具体的な様相を知る資料は限られ、近松浄瑠璃は重要な史料と位置付けられる。

なお、「ミコ」の表記は「神子」や「巫女」など様々に表されているが、ここでは天王寺神子に関する表記は史料上から鑑み「神子」とし、また、「巫女町」に関しても神子町とし、その他は引用文献の表記を基本とする。

一 天王寺村神子町について

柳田國男が述べているように、天王寺神子たちが活動していたのは天王寺村の一角であった。『大阪ことば事典』によれば、神子たちが活動していた「巫女町」は現在の天王寺警察署の北裏の東西の細い筋であったとのことであるが、その実相については未だ明らかにされていない。冒頭にもその重要性について述べたが、天王寺神子の諸相を探るためには、神子たちの活動の拠点であった神子町についてその歴史と様相について検証することは不可欠であると考ええる。

1 天王寺村と四天王寺について

最初に天王寺神子および神子町について、より理解を深める意味から、神子町が存在した近世天王寺村（現大阪市天王寺区）および四天王寺について概略しておきたい。

天王寺村は四天王寺の門前町として栄えた村であり、中世においては住吉大社、熊野詣、高野山への参詣街道としても賑わい、特に西門あたりは西方浄土信仰の影響もあり、時には大規模な市が開かれるなどその盛況はよく知られるところであった⁽⁸⁾。

近世の天王寺村は摂津国東成郡に属し幕領として大坂代官所の支配下にあった。村高7209石余の広い村で、そのうち1177石が四天王寺の寺領であった。村の大半は農地であったが、四天王寺が支配する門前町としての「町」も存在し、近世後半には大坂三郷の町続在領として町場化が進行するなど四天王寺門前周辺は大坂三郷と一体化した様相を呈していた。そのため天王寺村は代官所と大坂町奉行所の二重の支配を受けるといふ複雑な行政状況にあったといえる⁽⁹⁾。また、非人の集住するいわゆる四ヶ所垣外の内最大規模である悲田院垣外が四天王寺の南東にあったとされ、非人たちは代官所と奉行所、および四天王寺の支配下にあった⁽¹⁰⁾。

四天王寺は六世紀末に聖徳太子の発願により建立されたとする古刹であり、大阪を代表する大寺院である。八宗兼学を旨とし特別の宗派に囚われない教条は時代を問わず老若男女の多くの人々を参詣へと誘い、また、病者や乞食の救済にもあたり説経の舞台にもなっている⁽¹¹⁾。

四天王寺の主な伽藍は夏の陣によって焼失したが、元和九年（1623）に再興される。近世の四天王寺は元和元年（1615）には天海坊によって妻帯僧や他宗尼の追放などの大改革がなされ⁽¹²⁾、天海坊が創建した江戸天台宗本山東叡山寛永寺の末寺となっている。

四天王寺では現在も多くの祭事や法会が営まれているが、中近世においてこれらの多くは舞楽法要と称される荘厳な舞楽の演奏を伴うものであった。これら祭事は衆徒と呼ばれる僧集団はもとより、泰河勝を祖とする由緒をもつ楽人（伶人）集団と神子の夫などの下級役人、祭事の裏方として公人組織、寺領の百姓等によって支えられていた⁽¹³⁾。

2 神子町の様相

近世の神子町の様相を知る史料として「あすならふ拾遺」がある。「あすならふ拾遺」とは、

収録されている『近世大坂風聞集⁽¹⁴⁾』の「解題」によれば、作者やその詳細については不明であるが、写本の「引用書目解題」には「随筆体にして、見聞にまかせて遊興・芝居・俳人・絵画・商売等の事を記す。」と書かれており、近世大坂の世相・風俗資料として貴重な風聞を収録している、とのことである。「あすならふ拾遺」に記された神子町に関する条が次である。

○天王寺みこ町名目

南側西より、橘屋小女郎・ゐんきよ藤・黒うるし本家・せんたんの木。北かは西より、黒格子まむ・黒格子よめ・藪内かめ・升屋女郎・ふちや小女郎、天王寺一舎利配下のよし。夫とは天王寺役人なりとそ。因云、浪花古図に名高き七不思議せんたんといへるものあり。則、梅檀木の名今船場に残れり。余朋祥雲、この旧跡を天王寺辺古老にもとめたと証拠なきよし。近頃ふと古図面に引合を猶其辺考合ける老人につきておしきはめたる二、今合法か辻東南、一心寺境内藪の下手にきはめたり。是迄千日のあたり、又は坂町うらてとも云ハ、さたかならず。しかるに神巫町せんたんの木といへるあり。右神子の旧伝は此梅たんの木の下家居したるより、此字なを呼へりとそ。さては七不思議の名木は天王寺境内領に相違なし。むかしは此巫児もところどころにありたるを、御当代になりて一つ処に住居するなり。故に神巫町となれり。藪のうちなとも其住居出してしらる。

（傍線は筆者による）

「天王寺みこ町名目」とあるように天王寺村の神子町の具体的な様相と共に各々の神子名の由来、および神子町の由来に関して作者の知るところや推測を記したものである。すなわち神子町は路地を挟んで南側に西より橘小女郎、いんきよ（隠居）藤、黒うるし本家、せんたん（梅檀）の木、四軒、北側には黒格子まむ（万）、黒格子よめ、藪内かめ、升屋女郎、ふちや（藤屋）小女郎の五軒の神子たちの家々が立ち並んでいたと考えられる。家々の前には看板、あるいは暖簾が掲げられそれぞれの神子の家がわかるようになっていたのだろう。「黒格子」と名乗った神子家が二軒あり、後に述べる近松作品に登場する「黒格子神子辻」は実在した人物をモデルにしたと考えて間違いはないだろう。

作者は神子の名について、「せんたんの木」や「藪の内」は、以前神子が住んでいた場所から由来するものではないか、と推測している。そして、以前は別々に住んでいたが当代、すなわち徳川幕府時代に神子たちが一箇所に集まり（あるいは集められ）神子町となった、と記している。このことは神子町は中世から存続したのではなく、近世になって何らかの理由をもって神子たちが集住し名づけられた町であることを示唆している。

3 神子町の創設

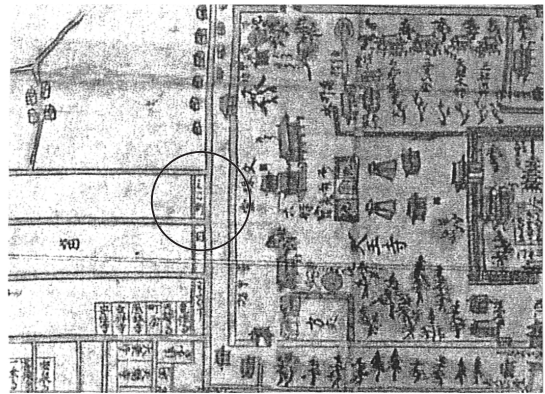
前述の「天王寺みこ町名目」は随筆体であり史実とは限らないが、当時の状況や風聞を反映したものであり史実に近い内容と判断できよう。そうとするならば、神子たちが集住し（され）たことにより神子町が創られたのはいつ頃であろうか。

まず、十七世紀後半に刊行された大阪近郊の地図よりみてみたい。貞享四年（1687）に刊行された「新撰増補大坂大絵図」には四天王寺北東の位置に不明瞭ではあるが「みこまち」と読み取ることができる【図1】。ではこうした図版に神子町はいつ頃から登場してくるのか。現在、大阪市立図書館にて被見可能である「近世大坂地図集成⁽¹⁵⁾」、その他被見できた十八世紀前半までの古地図の神子町記載の有無が次の表である。

神子町の有無（○：有、×：無）

① 大坂三郷絵図：明暦元年（1655）	×
② 新板大坂之図：明暦三年（1657）	×
③ 新撰増補大坂大地図：貞享四年（1687）	○
④ 辰歳増補大坂図：元禄元年（1688）	×
⑤ 新撰増補大坂大絵図：元禄四年（1691）	○（貞享版とほぼ同じ）
⑥ 摂津大坂図鑑綱目大成：享保末（1730頃）	○

神子町の記載のある③貞享四年（1687）より三十年前に刊行された、明暦三年（1657）の②「新板大坂之図」には神子町の記載がない。また、次年の元禄元年に刊行された④「辰歳増補大坂図」にも神子町の記載は見られない。地図上の町名の記載の有無は地図の精度や目的によって大きく異なるのは当然であり、②の明暦三年の「新板大坂之図」に神子町が無かったからといって、当時神子町が存在しなかったことの実証とはならない。したがって、これらの古地図の神子町記載状況から明確に読み取れることは、貞享四年には神子町は存在したが、それ以前については明らかではないということである。



【図1】 新撰増補大坂大地図（部分）

次に、近世大坂で刊行された案内書より検証していきたい。延宝七年（1679）に刊行された大坂最初の案内書である『懐中難波雀⁽¹⁶⁾』の「いろは」順の「み」の項には次のような記録がある。

【史料1】

諸商人・諸職人賣物所付

㊦

宮 屋 安 土 町より御堂
 みすや 天満堀川
神 子 天王寺あふき村

この案内書は当時の職人や商人がどのような町・町筋に住んでいるのかを「いろは」順に詳しく載せており、神子も諸職人の梓に名を連ねている。ここでの神子の「売り物所」は「天王寺あふき村」とある。

一方、延享四年(1747)に発刊された情報・案内誌『改正増補 難波丸綱目⁽¹⁷⁾』には「諸商人・諸職人売物所付」と同様の内容の「諸職人・商人所附」が、延享四年と安永六年(1777)の両年にわたって次のように記されている。

【史料2】

諸職人・商人所附		
延享四年(1747)		安永六年(1777)
㊦		
宮屋 小宮	安土町井池より御堂	安土町井池筋より御
小社	の前迄	堂の前迄・心斎橋筋
宮みこし		
<u>梓神子</u>	<u>天王寺神子町</u>	<u>天王寺神子町</u>
みす・すだれ	北久太郎町一丁目・	北久太郎町筋・
	二丁目	難波橋筋

【史料2】では神子の「商人所」は両年とも「天王寺神子町」となっている。すなわち、【史料1】および【史料2】より推測できることは、神子たちは延宝七年(1679)には天王寺村で活動していたが、その地域は神子町ではなく「あうき村」であったのではないかということである。したがって、この時点において神子町は未だ創設されていなかった、と考えるのが自然であろう。

では、「天王寺あふき村」とはどのような村なのであろうか。大坂三郷とその周辺の町名や橋、堀川を記した『大坂町鑑⁽¹⁸⁾』宝暦六年(1756)版には、「みこ町」が三郷の町と共に記され、場所は「天王寺村之内」となっている。また、「神子町」は異名であり正式の町名でないことも明らかにされている。その他の天王寺村の町名は最後に「追加 天王寺村町名寄 御代官所の分」として二十二町、および「寺領之分」には七つの地域名が記されている。この両方共に「あふき村」と表記された町は存在しないが、天王寺村には「東小儀町」「西小儀町」があり、天保十三年(1842)版には「をぎ」とふりがながうたれている。「あうき」とは「オウギ」と音節し、極めて「をぎ」に近く「あふき村」は「小儀村」であったといえよう。弘化二年(1845)の「弘化改正大坂細見図」には、西小儀町が四天王寺の北西の大通りに記されている。小儀町は天王寺村においては一番賑やかであったとされる、西門および勝漫院の付近であったことがわかる。すなわち神子たちが神子町に移る前は小儀町に住んでいた、あるいはその周辺で「営業」していたと考えられる。

十八世紀以降作成の地図には町名記入が少ないにもかかわらず神子町が記入されているもの

があることや、また、『大坂町鑑』には、四天王寺領の「ろくまんだい」や先の小儀町の場所を表すのに「天王寺神子町ノにし也」と表現されていることより、神子町が大坂人にとって印象深く存在感のある町であったことを窺うことができる。『大坂町鑑』の初版が宝暦六年(1756)とはいえ、「神子町」の存在感の大きさから察するに『懷中難波雀』が執筆された延宝七年(1679)に神子町が存在していたならば、梓神子の営業場所を「あうき村」とするとは考え難い。

以上、古地図および案内書の記述内容より神子町の創設は少なくとも『懷中難波雀』が刊行された延宝七年(1679)以降、「新撰増補大坂大地図」が出された貞享四年(1687)以前と推測される。それまで神子たちは「天王寺みこ町名目」に記されているように、四天王寺に近接する場所で集団、あるいは個々で営業していたと考えられる。

3 神子町創設の背景

では、神子町の成立を十七世紀後半とするならば、なぜこの時期に神子の営業場所を四天王寺の西側、すなわち四天王寺の門前町として多くの人が集まった町場から、北東側のやや寂しいと思われる通りへまとまって移されなければならなかったのか。当時の神子町周辺は先述の【図1】からもわかるように四天王寺寄りには民家があったが、神子町辺りは民家も少なく畑や荒地が広がっている地であり、口寄せ業とはいえ商売をする場所にふさわしいとは思えない⁽¹⁹⁾。そのような地にあえて神子たちを集約したのはなぜだろうか。神子が口寄せや祈禱を生業とする民間宗教者であったことを考えるならば、当時の社会状況との関係が強いと推測される。

元和五年(1619)より幕府は様々な寺院法度を発布し、寺院の統制を強め本末制度の確立に力を注いでいる。寛文五年(1665)には「諸社禰宜神主法度」五箇条が触れられ、中小の神社支配の強化に努め、寛文十一年(1671)には諸藩に宗旨人別帳の作成を命じ切支丹取締を徹底させた。また、天和三年(1683)には土御門家陰陽師支配の御朱印状が出され、天和四年には山伏の統制を命じるなど民間宗教者統制を強化している。これらの政策はもちろん一気に進んだわけではなく、紆余曲折を経ながら全国に周知されるのだが、徳川幕府における宗教政策の根幹はこの時期にほぼ形づくられたと考えてよいだろう⁽²⁰⁾。

十七世紀の大坂は、豊臣家との戦いで荒れた市中の再建と、近畿における政治・経済・軍事の中核都市としての建設、整備、治安維持が重要な課題であった。こうした中で行われたのが幕府の宗教政策に呼応して、あるいは大坂町奉行独自の民間宗教者および非定住者への統制であった。

塚田孝氏は大坂における勧進宗教者に関わる町触を一覧にしている⁽²¹⁾。その内の十七世紀における内容をみると、慶安二年(1649)の万治一年(1658)に「山伏仕置事」、また、寛文六年(1666)には、市中の民間宗教者の居住や宗教活動を規定した「宗教者に関する五箇条」が出されている。塚田氏はこの「五箇条」について、江戸で出された全国触を受けて出さ

れたものであるが、内容は大阪独自のもので明暦三年（1657）には既に同様の触が大阪町奉行より出されておりその内容を踏まえたものであり、またその後の触はこの内容に準じたものであった、と述べている。寛文十二年（1672）には市中の願人たちの争論を受け、かれらの職掌と職分を明確化すべく「願人仕置之事」、「願人仲間連判一札之事」が出されている⁽²²⁾。このように十七世紀の大坂は都市政策の一環として社会秩序維持を重視し、民間宗教者の宗教活動の制限、居住条件の吟味、職分・職掌の明確化などにより管理統制を強めたのである⁽²³⁾。幕領である天王寺村ではあるが、三郷続きの四天王寺下の町で営業する天王寺神子にもその影響は大いにあったと考えられる。史料による明確な根拠は今のところ見出せないが、民間宗教者の一翼である梓神子を、本来の彼女たちの居住地（後述するが林町）と思われる場所に集約したのはこうした都市政策・宗教政策の一環によると考えるのは自然であろう。すなわち、神子町の成立は近世都市大阪の歴史と不可分にあったといえる。

二 神子の夫と四天王寺

1 神子の夫の役割と位置

「天王寺みこ町名目」の内容において神子町以外に注目されるのが、神子と四天王寺との関係である。神子は寺僧の一騰である一舎利の配下にあり、神子の夫は四天王寺の役人であるという。前述したようにここに記述された内容が神子町の成立を含めて必ずしも史実であるとは限らないが、当時の社会状況や人々の認識を少なからず反映していることは間違いないだろう。ここでは記述を手掛かりとして、四天王寺に関する史料から神子の夫が天王寺とどのような関係にあるのかを探ってみたい。

まず、四天王寺の史料に神子の夫がどのように記されているのかを見てみたい。

『四天王寺史料』（注⑥参照）に所収されている「摂州四天王寺年中行事」（四天王寺楽人太秦昌名が享保七年（1722）に記した年中行事の詳細な式次第）の「聖霊会」に、「次獅子^{ミコ}ノ夫也、次菩薩同人躰菩薩装束ヲ着シテ龍頭ヲ持ツ也」とある。「獅子^{ミコ}ノ夫」が聖霊会において獅子と菩薩の役を奉じているとして、わざわざ「神子」に「ミコ」の振り仮名が附されている。また、同「常楽会聖霊会格別故実」には「荷太鼓鉦鼓林町神子^{ミコ}夫^フ支配即持之着麻上下菩薩獅子同人体勤仕之。」と記され、「神子夫」の「夫」には「ヲット」と振り仮名が附されている。常楽会・聖霊会は近世四天王寺を代表する大舞楽法要であり、特に聖霊会は四天王寺を建立したとされる聖徳太子の生誕を祝った法会として現在も盛大に催行されている。これらの舞楽奉納において、「菩薩」と「獅子」等を演じる者は「獅子^{ミコ}ノ夫」であることが再度にわたり明記され、また「林町神子夫」より彼らが「林町」住人であることも明らかにされている。「故実」に残されていることから、彼らは近世以前より神子の夫としてこれらの役割を担っていた可能性も示唆されている。

同じく『四天王寺史料』に所収されている『天王寺誌』の「役人記」には、寺僧である一舎

利、二舍利を先頭に約三十六の職役が記されている。番人・大太鼓出入役人に次いで三十四番目に記されているのが次である。

林ノ者十六人

菩薩師子等役人

谷ノ者六人

亀井水守等ノ役

相坂ノ水守一人

この記述より、四天王寺において「林ノ者」と称される者たちが菩薩・獅子等を担う役人でありここでの「林ノ者」は「常楽会聖霊会格別故実」にある菩薩・獅子役の「林町神子夫」に相異なることがわかる。また、彼らの下位には水守である「谷ノ者」・「相坂ノ水守」がいるのみであり、四天王寺における「林ノ者」の位置が計り知れるものである。「役人記」の記録より神子の夫は下級ではあるが「天王寺みこ町名目」に記されていたとおり、四天王寺役人であり神子も四天王寺の支配下にあったと考えられる⁽²⁴⁾。神子と四天王寺の下級役人が夫婦であることは、世間においても周知された事実であったのであろう。

2 林町と神子町との関係

神子町が異名、俗名であることは既にのべたが、では神子の夫たちが居住していた林町とどのような関係があるのだろうか。

『皇都午睡』は大坂に生まれた歌舞伎作者である西沢一鳳が、嘉永三年（1850）に当時の世相を著わしたもののだが、初編中巻「梓巫子」の条には次のように記されている⁽²⁵⁾。

天王寺のはやし町に梓巫子のすめる処にして二季の彼岸等を在所の人のここに来りてなき人の口を寄るとて梓の弓に其鬼神をま称き往事を泣。殊に二季の彼岸に無としほあわれに覚由かし。このはやし町にすめる巫子乃名の昔めきておかしければ書つく。橘屋小女郎、隠居藤、黒格子の元家、梅檀の木の姉、藪乃内の亀、升屋女郎、藤屋の小女郎、黒格子の万、黒格子の嫁、此余にも何また何事中に黒格子殊に名高し。

冒頭に「天王寺のはやし町に梓巫子のすめる処」と書かれている。ここに書かれている「はやし町」は表題、前後の関係からみて「神子町」を指していることは間違いないであろう。すなわち神子町は林町の異名か、あるいは林町の一角を神子町と呼んだと推考される。神子および夫たちは元々林町に住んでおり、神子たちはあうき町など四天王寺の門前近くで口寄せを行っていたのであるが、前述のように十六世紀後半に林町に集約されたと考えられる。

では、神子とその夫たちが住んでいた林町とはどのような町であったのか。「役人記」に「林ノ者」と記されているのには何か意味があるのだろうか。先述の『大坂町鑑』には「天王寺村之内」として林町が記されているが、披見した大坂古図においてはその所在は確認できない。しかし、享保十七年（1732）の『仁風一覧⁽²⁶⁾』、および林町が確認できた四天王寺所蔵文

書⁽²⁷⁾には「南平野町之内林町」とある。南平野町とは大坂三郷の南側に続く町であり、林町が四天王寺の北側に位置していたことの証となり、「新撰増補大坂大地図」の「みこ町」と一致するものである。また、『大阪ことば事典』に記された現在の天王寺警察署の北裏の東西の位置でもある。

3、神子および神子の夫の社会的位置

林町の場所と彼らの社会的位置が推測できる文書が『四天王寺古文書⁽²⁸⁾』の「四天王寺附役人名前書」である。「公人」「供御人」に続き「小預」および後書として次の記録がある。

（前略）

小預

摂州東生郡南平野町九丁目

甚兵衛

林町

同拾壹丁目

市右衛門

武兵衛

伊兵衛

同林町

弥三兵衛

寅藏

幼少ニ付代利

忠兵衛

（中略）

右者、毎年末、於四天王寺ニ

御朱印高収納物之内を以、役料相渡候事

御料所天王寺村庄屋

松本藤左衛門

井川与三左衛門

右者、兩人共従往古由緒有之數代相続仕罷在候事

前書名前之分者、御料所ニ住宅仕

四天王寺附役儀等勤務相続罷在候、以上

文政三庚辰年

四天王寺役人

六月

大西真喜多 印

古澤 内蔵 印

この文書より窺えることは林町が前述と同様に南平野町にあること、および林町に住む住民は四天王寺の寺院外役人集団においても最下位の役職と思われる「小預」を担っていることである。「小預」がどのような役儀であったかは不明であるが、後書より彼らは四天王寺の「御料所⁽²⁹⁾」とされる地に住み、四天王寺より役料を受けていることがわかる。また、成人の男性がいない場合幼少でも役儀が任ぜられていること、および「役儀等勤務相続罷在」より役儀は「家」が受け継いでいると理解されよう。

「林ノ者」は前述のように四天王寺内の下級役人として菩薩・獅子等の役を受け持ち、かつ、四天王寺の外部役人組織においても最下級の役人として代々位置付けられている。これらよりかれらは「林ノ者」として四天王寺内ではもちろん、周辺社会においても四天王寺と深い関わりをもつ極めて低い身分の者として認識されていたと考えられる⁽³⁰⁾。いつの時代からかは不明であるが、彼らが一定の居住地で生活し、代々その職掌を受け継ぎ、四天王寺との関係を保ってきたことは、舞楽集団や公人組織と四天王寺との近世以前からの関係からみてもほぼ間違いないであろう。「林ノ者」を夫にもつ梓神子も当然低い身分の者たちであったであろうが、四天王寺文書において敢えて「神子ノ夫」と記されているのは、神子たちが大坂人にとっては靈験高い「梓神子」として一目置かれる存在であった故であることは、近松の文章からも想像できる。

では、天王寺神子は梓神子としてどこに支配されていたのであろうか。信濃の梓神子が習合家の支配下にあったことは冒頭で述べたが、これまでの考察内容から天王寺神子は夫と共に四天王寺の配下にあったと考えるのが妥当であろう。梓神子が寺院の支配下にあった例は管見の限り見出せないが、近世における梓神子の支配体制は地域やそれぞれが歩んできた歴史によって様々であり、本所や夫以外の支配下にあった梓神子もいたと考えられる

三 近松作品に描かれた神子の様相と宗教性

近松門左衛門（承応二～享保九年（1653～1725））は近世大坂を代表する浄瑠璃作家であり、『三世相』、『卯月紅葉』とその続編である『卯月の潤色』の三作品に梓神子を登場させている。これらは近松が得意とした市井の事件を題材とした「世話物」であり、大坂の情景をリアルに物語の舞台背景として表現している。伊藤毅氏は「近世都市と寺院⁽³¹⁾」において近松の描写を引用しつつ寺町界限を解説しており、その状況描写のリアル性を高く評価している。近松のこうした表現上の特質と近松と共に浄瑠璃を新たな境地に導いた竹本義太夫が天王寺村出身であることを鑑みるなら、近松作品の神子をめぐる表現は当時の梓神子たちの状況を十分に反映したものと考えてよいだろう。近世における梓神子の様相を知る資料は【図2】（「百人女郎定⁽³²⁾」）のように図としては残されているが、口寄せの様相を著しているものは極めて少なく、近松の浄瑠璃本は梓神子の具体的な姿を知る貴重な史料と位置付けられると考える。

この三作品より、神子を取り巻く状況、および寄せの様子とそこで語られる祭文の内容を検討していきたい。

1 神子を取り巻く状況

まず、『三世相』（貞享三年（1686）初演）であるが、延宝六年（1678）に亡くなった大坂新町の名妓夕霧太夫をモデルとしたもので、夕霧と楽人狛野左京盛光の間の一人娘春姫の運命を巡っての物語である。三世相とは仏教における過去・現在・未来の因果・吉凶を占うことを意味するが、夕霧の霊をとおして娘の将来を占う意味を持ったものであろう。

春姫が夕霧ゆかりの大坂新町を訪れると、ちょうど妹女郎たちによって別時念仏が行われており、黒格子の梓神子によって夕霧の霊が呼び寄せられる⁽³³⁾。

事なればくろがうしのあづさみこ。参られたりと申ける。

それこなたへと案内し仏前にこそとをしけれ。あまたの女郎座をしめて人々なりをしづめける。扱春姫は水手向物になれたる夏衣。とひ手に成てさしむかへば神子はじめす引梓弓。神おろしこそあはれなれ。

次に『卯月紅葉』（宝永三年（1706）初演）に描かれた神子の姿を見てみたい。この物語の内容は主人公の古道具屋の一人娘お亀とその入り婿与兵衛が、親たちとの不仲を悲観し心中に至るまでのものである。家出した与兵衛を心配したお亀が与兵衛の心情を知りたく、気心の知れた下女と供に二十二社めぐりの途中に天王寺村の神子町を訪れ、神子の中でも名の知れた黒格子の辻に夫の口寄せを依頼している情景である。

上手と聞きし神子の門、あゝ申し、ちと口寄せを頼みませう、とぞ案内ける、弟子の小女郎心得て、お通りなされと、戸を明けくれば、お亀一間に入りにつけり。しばらくありて立ち出づる、神子もよつほど見えるもの。ア、ようお出でなされました。大坂のお衆でござりますか、お供の、こゝへ上がって、まづ扇いであげさつしやれ、お茶持てお（じ）やや『卯月の潤色』（近松五十五歳、宝永四年（1707）初演）は前述したよう『卯月紅葉』の続編で、お亀と与兵衛は父の妾とその弟の悪事に陥れられ心中を試みるが与兵衛だけが生き残る。その後の与兵衛やお亀の伯母の様子を描いた物語である。お亀を想う下女と伯母は、お亀が言い残したいことがあったらと、生前訪れた天王寺神子の黒格子辻を再び訪れる。そこでの情景が次である。

神子の内には、心得て、茶を持つて出る、煙草盆、文庫の蓋に梓弓おくより神子も立ち出



【図2】「百人女郎品定」

でて、御祈禱か、口寄せか。お志の精霊は、目上か、目下か。古い仏か、神下ろしいたしては、お十二銅が一包み、御さきばらひが百二十、お望みしだいと言ひければ。

これら三作品の描写より天王寺神子を取り巻く様相を見てみたい。『三世相』は夕霧の別時念仏におけるものであり、神子町の黒格子の梓神子が大坂新町の店まで出向いている。神子は店の奥部屋の仏壇前で口寄せを行っており、この様子は【図2】を想像できるものである。図のようにそこには春姫をはじめ多くの女郎たちが集まり、神子の詞に耳を傾け亡き人を偲んでいる様子を窺う事ができる。

『卯月紅葉』と『卯月の潤色』は共に天王寺村神子町の神子の「店」を訪ねた設定であり、『卯月紅葉』の描写から「店」は門を構え、弟子が部屋に案内するほどの規模であったと見てとれる。これは神子の中でも名の知れた黒格子であり特別のものであった可能性はあるが、神子町の神子たちは「天王寺みこ町名目」に記されていたように神子名毎に「店」を持ち営業し、部屋にて口寄せを行っていたのであろう。

これらの内容より、天王寺神子は神子町の「店」に大坂やその近郊から依頼者が来訪し、店の部屋にて口寄せや祈禱を行っていたことが解る。また、法要などには大坂まで出かけていたようだが、旦那場を廻るといったものではなく新町といった特別の旦那を対象としていた可能性が高い。信州の梓神子は一定の地に集住していたが、彼女たちは神事舞大夫に引き連れられ一年のほとんどを旦那場廻りに費やしていたことは中野洋平氏が明らかにしたとおりである。また、甲斐の梓神子も信州とは違った形態ではあるが旦那場を廻るの活動であることは間違いない。すなわち、天王寺神子の活動形態は大都市大坂に隣接し、周囲に四天王寺をはじめ生玉社や今宮戎など幾多の名所旧跡があるといった神子町の条件から、大坂や近郊から依頼者が訪れやすく、したがって、旦那場を廻るという地方の梓神子とは違ったものであったといえる。

2 口寄せの様子と祭文

前出の三作品に著された口寄せと祭文の内容が次である。

『三世相』

抑地しやうじやうと申は地神のきよめ。内外しやうじやうと申は。此家の悪魔がうぶくの清め。天しやうじやうと申は今なき玉をみつせ川。六道四生の清めとかや。悉くましませどしやかの子みこが梓にひかれ。今の手向のうれしさに。より人や。よりくるやよりきたになふ昔語らん。あずさの弓によりくる人は。水むけがためにはたれ人成ぞ覚束なし

『卯月紅葉』

神子は合掌、目をふさぎ、数珠を繰り弾き、梓弓、神下ろしして、寄せにける。

天清浄、地清浄、内外清浄、六根清浄、天の神、地の神、屋の内には井の神、庭の神、竈の神、神の数は八百万、過去の仏、未来の仏、弥陀、薬師、弥勒、阿閼、観音、勢至、普賢菩薩、知恵文殊、三国伝来仏法流布、聖徳太子の御本地は靈山浄土、三界の、教主世尊

の御事なり。

『卯月の潤色』

千早振る御先祓の道浄め、天清浄とは水火の浄め、地清浄とは、屋内の浄め、内外六根清浄とは、世になき魂の道しるべ、六道四生の浄めぞかし、忝くはましませど、神と仏は夜と昼、娑婆と冥土は日光、月光、出づるも入るも同じ道、娑婆往来八千度、釈迦の子、神子が梓弓、（その後、梓弓の弦音に寄って来たお亀の霊の切ないことばが続く。）

三作品の口寄せに共通しているのは、まず、梓弓を弾きつつ天・地・六根などの清め祓いに始まり、それから梓弓の音色より神仏を下ろし霊の言葉を告げることである。梓神子として当然ではあるが、口寄せを行うに当たって梓弓とその音色が重要な役割を果たしている。

注目されるのは、神子が唱える祭文（呪文）の内容が、呼び出す霊により微妙に変化していることである。天や地の清浄から始まることは同じであるが、生きた人の霊では六根清浄の後にはあらゆる神仏への依頼となっている。しかし、亡くなった人の霊では『三世相』、『卯月の潤色』ともに「六道四生⁽³³⁾の浄めぞかし」とあり、死に口の清浄はこの世にない魂の道しるべとなるよう死生の業を浄めるものである、としている。また、新仏の口寄せである『卯月の潤色』では娑婆と冥土は日光と月光のような関係でその出入りは同じ道であり、その道を八千回も通った釈迦の子である神子だから梓弓の弦音で死霊を呼び寄せることができる、と唱えている。すなわち、神子は釈迦の子として特別の存在であるが故に娑婆と冥土を行き来できるというのだ。梓神子が死人の口寄せを行うことができる根拠が述べられており、神子の霊驗と特異な能力（者であること）を人々に納得させる内容といえる。また、仏教観の強い内容となっておりとともに「聖徳太子の御本地」であるとするところに四天王寺に従ずる天王寺神子の特性も明らかとなっている。

近世梓神子の口寄せの流れや神子の形成過程を知る興味深い史料があるので紹介しておきたい。文政二年（1819）に田村家役員の本庄内記が寺社奉行に出した一札である⁽³⁵⁾。

習合神道神差帰上法式、神託、笹祓勤方之儀、初二清之咒文を唱、弊持、神降之神歌同祓修業仕候得者、其病人之氏神並家内之慈神等之託御座候而、其後病人之祟り障り生霊死霊障礙出候而、何之祟何恨夫々告候義ニ御座候、其上願主之任願、右除祈願仕候、右之通り勤方往古より今迄職道秘法ニ御座候、尤梓神子之義者、七才才十三才まで寒行仕、其上伝授いたし候ニ付、縁組之義者一派之外決而他職江縁付の義者厳敷相停止候掟ニ御座候、（後略）

この一札は、神事舞太夫・梓神子支配の習合家が山伏や夷願人との争論の中、神子は習合家支配下の者（神事舞太夫）以外との縁組を許可できない理由をしたためたものであるが、この内容より、神子の口寄せの様子を窺うことができる。ここでは梓神子としつつも梓弓の役割は明らかではなく、笹や弊が神降ろしの祭具となっており天王寺神子とは相違があるが、初めに清めの呪文を唱え、次に神降ろしの神歌により霊を呼び出す手順は共通している。口寄せの法

式は時代や地域・組織・宗教によって相違があり一概には言い切れないが、近松の描いた天王寺神子の口寄せの様相は、近世における梓神子の基本態のひとつであった事がこの一札の内容より窺うことができる。

おわりに

先行研究に乏しくその姿が充分には明らかにされていなかった天王寺神子であったが、四天王寺の史料をはじめ近世における随筆や案内書といった大坂史料、および近松浄瑠璃本を掘り起こすことにより、神子町創設の歴史をはじめ神子たちの生活空間や夫と四天王寺との関係、そして口寄せの様相を一定探ることができたと考える。また、こうした天王寺神子の諸相を検証する中で、近世都市に生きる梓神子の特質が浮かび上がってきたといえる。

近世神子研究の第一人者である西田かほる氏は、神子は夫の存在を通じ本所との関係を持ち、みずからの立場を保証している⁽³⁶⁾、としている。これに対し、神田より子氏は東北の神子と修験との関係などの例よりそうとは限らない、と反論を呈している⁽³⁷⁾。林淳氏はこうした神子研究の到達において今求められるのは、「近世以降の神子を研究する場合、再生産の仕組みや檀那場の所有に注目しつつ、地域性の違いを繰り返す作業が必要となる⁽³⁸⁾」と述べている。

西田、神田両氏の論争、および林氏の指摘から天王寺神子を見た場合、天王寺神子は夫と共に大坂の大寺院である四天王寺に支配されていた可能性が高く、また、神子の弟子が神子家や神子名を継承していたと考えられる。

旦那場については不明だが、大都市に隣接し四天王寺などの寺社が多く存在するという立地条件より、神子町という固定地での「集客」が可能であり、広範な旦那場を持つ必要性がなかったと想像される。近世都市部における梓神子については先述したように、京においては散所を元とする北山に神子町が存在した。ここでの立地条件も大都市京に隣接し、周辺には鹿苑寺、北野天満宮などが在り人々が集散する場であり、極めて天王寺の神子町と類似している。すなわち、近世都市における梓神子は、都市に隣接するという諸条件の下、地方における梓神子とはまた違った諸相を呈していたといえる。このことは林氏の指摘の重要性を確認するものである。

今後、近世神子の多様性を明らかにする上で重要なのは、地方毎における神子の様相を検討することにあるが、特に研究実績の乏しい都市部の神子についての事例集積が求められるであろう。研究に当たっては神子町創設の例からも、近世という時代背景を視座に入れた追究が重要であると考えられる。

〔注〕

- (1) 柳田國男「巫女考」の初節「ミコと云う語」(『定本 柳田國男集』筑紫書房、1977年)。尚、「大阪」の表記に関しては、柳田の表記に従った。

- (2) 神田より子「近世期修験文書に見る神子の変遷」（『神子と修験の宗教民俗学的研究』第三部第三章、岩田書店、2001年）
- (3) 西田かほる「神子」（高埜利彦編『民間に生きる宗教者』吉川弘文館、2000年）
- (4) 中野洋平「信濃における神事舞太夫・梓神子集団の歴史的展開」（『藝能史研究』178号、2007年7月）・「信濃における神事舞太夫と梓神子」—信濃巫女の実像（『日本文化の人類学／異文化の民俗学』法蔵館、2008年）
- (5) 岡佳子「北山散所」（世界人権問題研究センター編『散所・声聞師・舞々の研究』2004年）
- (6) 牧村史陽編『大阪ことば事典』講談社学術文庫、1984年。
- (7) 棚橋利光編『四天王寺古文書 第一巻・二巻』【清文堂史料叢書】（清文堂、1989年）、同編『四天王寺史料』【前同叢書】（清文堂、1993年）、同編『四天王寺年表』（清文堂、1989年）
- (8) 伊藤毅「近世都市と寺院」（『日本の近世9』中央公論社、1992年）参照。
- (9) 渡邊忠司『大坂町奉行と支配所・支配国』東方出版、2005年。
- (10) 長尾健次「解説」（長吏文書研究会編『悲田院長吏文書』部落解放・人権研究所、2008年）
- (11) 「しんとく丸」ではしんとく丸がおと姫に一目ぼれする場となり、また「さんせう太夫」では主人公つし王の悪くなった足腰が、四天王寺の石の鳥居にすがることにより良くなる。
- (12) 前掲(6)『四天王寺年表』参照。
- (13) 南谷美保「江戸時代の聖霊会における御幸・大行道・還御」（『四天王寺大学紀要』52号、2011年）
- (14) 大阪市史編纂所編『近世大坂風聞集』（大阪市史料調査会、1988年）。「あすならふ拾遺」の他に「至享文記」「あすならふ」が収録されている。
- (15) 1980年、玉置豊次郎によって編纂された大坂古地図。「第一図難波往古図（版歴不明）より、第二十五図新町名人大阪市街全図（明治33年）までの古地図二十七枚が集成されている。
- (16) 『懷中難波雀』（塩村耕編『古版大坂案内記集成』和泉書店、1999年）
- (17) 『改正増補難波丸綱目』は志田垣与助によって撰された買物案内書であり、延享五年（1748年）に初版が出された後、数度にわたり改正版が出されている。本稿では大阪市立図書館史編纂室編『大阪編年史、第二十六巻「拾遺」』1978年に収録されている内容を参考とした。
- (18) 『大坂町鑑』は宝暦六年（1756）、天保十三年（1842）、明治三年（1870）に刊行され、有坂隆道・藤本篤編『大坂町鑑集成』（清文堂出版、1976年）として翻刻、出版されている。
- (19) 大阪市史編纂所編『近世の城南北平野町：上町にあった下町』（大阪市史料調査会、2009年）に、延宝五年（1677）頃は「平野町筋辺は野原であったようだ」とある。神子町は後に述べるように南平野町にあり、創設当時、周辺は寂しい場所であったと考えられる。
- (20) 高埜利彦『近世日本の国家権力と宗教』東京大学出版会、1989年参照。
- (21) 塚田孝「勧進宗教者の併存と競合」（『近世大坂の非人と身分的周縁』部落問題研究所、2007年）208～210頁。
- (22) 吉田伸之「鞍馬寺大藏院と大坂の願人仲間」（脇田修、他編『近世の大坂』、大阪大学出版会、2000年）にこの事情および内容について詳述されている。

- (23) 「宗教政策」(大阪市史編纂委員会編『新修大阪市史 第三巻』大阪市、1988年)、および前掲(20)など参照。
- (24) 前掲(12)において南谷氏は、神子の夫が聖霊会において菩薩・獅子の役を担っていることを指摘しているが、役人としての認識はされていず「幕府領住民者」としている。
- (25) 西沢一鳳『皇都午睡』は翻刻されていない。いくつかの異本が存在するが、本稿では「大阪市立図書館蔵「平野亀之輔蔵本」より筆写(1902年)」を引用した。
- (26) 『仁風一覧』とは飢饉などの時に施しをした人物の名簿であるが、本稿の史料は前掲(18)に掲載されている内容を参考とした。
- (27) 四天王寺所蔵文書2-171・172「林町住人京屋専随の鳶田墓所への観音像建立願文」(大阪市立大学大学院文学研究所都市文化研究センター蔵写真版より)
- (28) 棚橋利光編『四天王寺古文書 第一巻』清文堂出版、1996年
- (29) 文書の内容より林町は寺領ではなかったが、それに近い地域とされていたことが窺える。
- (30) 神子の夫たちは低い身分であったが、階級社会である近世において当然ではあるが非人との直接の接点は見いだせない。しかしながら、代官所は安永八年(1779)に神子町に牢屋敷を建て、その牢番として非人たちを当てている。また、神子町の北側に隣接する毘沙門池地には悲田院の外地となる垣外ができており、神子町の周囲は非人と切り離せない環境にあったといえる。
- (31) 前掲(7)123~124頁。
- (32) 浮世絵師西川祐信が享保八年(1723)に出したもので、当時の女性の風俗が描かれている。
- (33) 近松全集刊行会編『近松全集第一巻』(岩波書店、一九八五年)
- (34) 仏教用語で六道は「衆生が自ら作った業によって生死を繰り返す六つの世界(地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天)」をいい、「四(卵・胎・湿・化)生と合わせて六道生死という」(中村元他編『仏教事典』岩波書店、2002版)
- (35) 一次資料を確認することができなかったため、林淳「梓神子と神事舞太夫」(『国立歴史民俗博物館研究報告』142集、2008年)から引用させて頂いた。
- (36) 前掲(3)81頁。
- (37) 前掲(33)44頁。一次資料は神田より子「近世期修験道に見る巫女の宗教儀礼」(『宗教と儀礼』ハンシン大学、2005年)。
- (38) 前掲(33)43頁。

(ほりおか きみこ 文学研究科日本史学専攻博士後期課程)

(指導教員：八木 透 教授)

2015年9月30日受理